

医師団陰謀事件の開始と終結の検討

笠原 孝太

Kota KASAHARA. The Study on the Beginning and the End of the “Doctors' plot”. *Studies in International Relations* Vol.41, Consolidated Edition. February 2021. pp.129-138.

This study reveals the beginning and the end of the Doctors' Plot in USSR. The Doctors' Plot became known to the public after the article “Sneaky Spies And Killers Under The Mask Of The Medical Professors” published in the newspaper “Pravda” on the January 13, 1953 and is famous for being Stalin's last group purge.

This paper traces the prehistory of Doctors' Plot to the time just before Zhdanov's death in 1948 and reveals how doctors were arrested in the wake of the “Anti-cosmopolitan campaign” (January 1949). Lieutenant Colonel Ryumin of the Ministry of State Security of the Soviet Union was the one who caused Doctors' Plot by his forcible interrogation.

Even though arrested doctors' future should have been dramatic or even dreadful, in March 1953 it was suddenly changed by Stalin's death. For the first time in USSR history in “Pravda” the Home Office admitted policy mistakes, and all of the arrested doctors were released. Regarding the end of the purge, this study points to Beria's activity behind the post-Stalin turmoil.

はじめに

1953年1月13日、当時のソヴィエト連邦共産党の機関紙であった『プラウダ』に掲載された記事は、世界に衝撃を与えた。

記事は「教授・医師の仮面を被った卑劣なスパイと暗殺者⁽¹⁾」という見出しで、クレムリン直属の高名な医師団の逮捕を報じた。その内容は、医師団が「自らの立場を利用し、さらに患者の信用を乱用して、意図的かつ非道に彼らの健康を破壊した。彼らに不正確な診断を下し、その後、不適切な治療方法で患者を殺害した⁽²⁾」というものであった。

こうして、「医師団陰謀事件」が世に知られることになった。逮捕者として報道されたのは、ミロン・ヴォフシ、ウラジーミル・ヴィノグラドフ、ピョートル・エゴロフ、アレクサンドル・フェリドマン、ヤコフ・エチンゲル、アレクサンドル・グリーンシュテイン、G. I. マヨーロフ、ミハイル・コーガン、ボリス・コーガンの9名の教授で、

いずれも権威ある医師だった⁽³⁾。

スパイ医師が医療行為に見せかけて、故意に患者を死に至らしめていたというだけでも大ニュースだが、この記事が衝撃的だったのは、彼らの内3名がイギリスの諜報機関の手先で、他の6名はアメリカに買収されたスパイであり、国際ユダヤ人ブルジョア民族主義組織「ジョイント」に所属していたと報じた点である⁽⁴⁾。

全員がユダヤ人ではなかったが、エゴロフ、M. コーガン、B. コーガンの3人以外は、明らかに名前がユダヤ系だったため、『プラウダ』の報道はユダヤ人医師による暗殺事件というセンセーショナルな内容になった。

一方で彼らの医師としての腕は確かなもので、逮捕された医師団の中でもエゴロフ、ヴィノグラドフ、マヨーロフの3人は、1949年7月27日に死亡した、ブルガリア首相ゲオルギー・ディミトロフの死亡診断書にサインしたほどの医師だった⁽⁵⁾。特にヴィノグラドフは、スターリンに近づくことができた唯一の医師だったといわれて

いる⁽⁶⁾。

従来のソ連の例を見れば、逮捕された医師団は「人民の敵」であり、処刑または獄中死を遂げることが予想された。しかしながら、この報道から約2か月後の1953年3月5日にスターリンが死去したことから、事件は予想とは全く異なる結末を迎えることになった。同年4月4日に『プラウダ』紙面上で、医師団の無実が報じられ、全員が釈放されたのである。

このように医師団陰謀事件は、結果的に「でっちあげ」ではあったが、その実態については史料の少なさも原因となり不明確な部分が多い。そこで本論文では、事件の開始と医師団解放の理由について検討したい。

医師団陰謀事件の史料が少ない理由は、ゲオルギー・マレンコフやニキータ・フルシチョフなど、当時この事件に関わっていた人物が、事件の真相を葬るために、意図的に関係書類を処分してしまったからだと言われている⁽⁷⁾。

したがって、本論文では日本の先行研究とロシアの先行研究を基礎として、医師団陰謀事件の開始と終結を再検討する。

1. 医師団陰謀事件の開始過程

1-1 ジダーノフの死とチマシュークの左遷

全世界を驚かした医師団陰謀事件は、そもそものようにして始まったのだろうか。本章では医師団の逮捕よりさらに前に遡ることで、その開始過程を解明したい。

まず先行研究の考察も兼ねて、従来の日本の説に触れておきたい。事件当時、可能性が指摘されたのは、マレンコフとラヴレンチー・ベリヤの抗争説である。スターリンの生前、その後継者として最有力視されていたマレンコフが、スパイ医師団の早期発見ができなかったことを口実に、副首相ベリヤの力を削ごうとした工作が、この事件の真相だという分析である⁽⁸⁾。これは、マレンコフがベリヤの排除を狙ったという考え方である。

一方で、同じ抗争説でもベリヤを主体とする説もある。ベリヤが国内でスパイ、陰謀者、殺人者をでっちあげるにより、「恐怖と無秩序」を

ばらまいて、より強大な権力を獲得しようとしたという説である⁽⁹⁾。

このマレンコフとベリヤの権力抗争説は、事件公表の約2か月後にスターリンが死去したことを考えれば、ポスト・スターリンを見据えた両者の闘争として、他の説⁽¹⁰⁾よりも説得力はある。

しかし、マレンコフとベリヤの抗争説には、“スターリン不在”という無視できない欠陥がある。確かに当時スターリンは健康不安を抱えていたが、意識がなかったわけではない。スターリンは1953年3月1日に倒れるまで、その力を保持していた。したがって、スターリンを無視して、マレンコフとベリヤがこのような大掛かりな権力抗争を行うことは考えられない。つまり、この事件は、別の経緯から開始されたと考えるべきである。

後にフルシチョフが語ったところによると、医師団陰謀事件は、1952年10月の第19回党大会よりしばらく前に、あらかじめ仕組まれていたというが⁽¹¹⁾、その時期は1948年である。そして、この事件に本人の意思とは関係なく、“病死”という奇妙な形で関わるのが、意外にもソヴィエト連邦最高会議議長を務めたアンドレイ・ジダーノフである。

1948年8月7日医師ソフィア・カルパイは、ジダーノフの心電図を取った後、8月28日まで休暇に入るため、ジダーノフに22日間“積極的に”養生するよう指示した。ジダーノフは公園を散歩したり、映画館に外出したり、足のマッサージを受けるなど、まさに積極的に養生した⁽¹²⁾。

8月28日、今度は心臓医のリディア・チマシュークが、ジダーノフの心電図をとったところ、心筋梗塞の前兆の波形を確認し、直ちに絶対安静を要すると診断した。しかし、このチマシュークの診断は上司だったエゴロフに軽視され、必要と思われた治療は一切行われなかった⁽¹³⁾。これは責任者だったエゴロフが、異常の発見の遅れによる自身の責任を回避するために、黙殺を決めたためだと考えられる。

この事態を受けて、翌8月29日に再びチマシュークはジダーノフの心電図をとり、安静が必要だとする趣旨の手紙を、ジダーノフの警護A.M. ベロフを通じてスターリンの警護責任者だっ

たニコライ・ヴラシクに宛てて書いた。手紙はモスクワに到着し、スターリンに手渡されたが、8月31日にジダーノフは滞在中のヴァルダイで死去した⁽¹⁴⁾。

A. N. ヒョードロフ医師は、ジダーノフの死因調査のため遺体を解剖し、心筋梗塞の存在を確認した。しかしヒョードロフは、エゴロフから心筋梗塞の存在が明らかになると、それに気が付かなかった自身の責任問題に発展するため、心筋梗塞については解剖結果に書かないでほしいという依頼を受けて、解剖結果でその存在に触れなかった⁽¹⁵⁾。このことは、以後誰も確かめようがない事実として処理された。

こうした工作もあり、スターリンはジダーノフの死に不信感を抱かなかったようで、特に調査を指示することはなかった。ただ一つだけ、ヴラシクに対してチマシュークから受け取った手紙を文書保管室に送るよう指示した⁽¹⁶⁾。

実は、ベロフは最初にチマシュークから手紙を受け取った時、モスクワに送る前に彼女の上司だったエゴロフにそれを見せていた⁽¹⁷⁾。エゴロフに勝手な行動を知られたチマシュークは、これが原因で別の病院に移動することになった⁽¹⁸⁾。ただし、この出来事は一人の女医の左遷話として終わることはなかった。

1-2 反コスモポリタニズムからの派生

翌1949年1月28日『プラウダ』に、「ある反愛国主義的な演劇評論家集団について」というタイトルの記事が掲載された⁽¹⁹⁾。スターリン自ら校正したこの記事には、演劇批評家たちの批評が、反愛国主義的で、ソ連の文学と芸術に損害を及ぼし、人民の誇りであるモスクワ芸術座やマールイ劇場の芸術を攻撃にさらしているという内容が書かれていた⁽²⁰⁾。

この記事によって反コスモポリタニズムのキャンペーンが開始されたが、その実態は反ユダヤ主義運動であった。スターリンは、公には反ユダヤ主義に反対の立場を表明していたが⁽²¹⁾、個人的にはユダヤ人に対して強い嫌悪感を持っていた⁽²²⁾。

表立ってスターリンが「反ユダヤ主義」のキャ

ンペーンを行わなかった理由は、共産党員が一貫した国際主義者であり、ソ連が人民の平等を標榜した社会主義国家だったからである。しかし、記事に掲載された批評家A. グールヴィッチ、ユ・ユゾフスキー、ヴァルシャフスキーなどはユダヤ人で、その実態が反ユダヤ主義運動であることは、当時のソ連では自明であった⁽²³⁾。

その後、「根なしのコスモポリタン」と呼ばれる人々（ユダヤ人）に対するプロパガンダ攻撃が強まり、秋には第二スターリン医療研究所でも粛清が行われた。その結果、研究所の指導部の一員であったヤコフ・エチンゲル博士が、不自然な理由で解雇されてしまった⁽²⁴⁾。

それから約一年後の1950年11月18日エチンゲルは逮捕され、アレクサンドル・シチュエルバコフ⁽²⁵⁾とマレンコフに対する「誹謗的デマ」を流布したとして告訴された⁽²⁶⁾。

これは、エチンゲルにとって全く身に覚えのない容疑だったが、意に反した自白を強制され、その自白を根拠に1951年1月5日、レフォルトスカヤ収容所に移された。エチンゲルはそこで念入りな拷問を受けることになった。この時、彼の拷問を担当したのが、国家保安省特別重要案件審理部の上級予審判事だったミハイル・リューミン中佐だった⁽²⁷⁾。

彼は拷問によって、エチンゲルに知り合いの医師たちが、「ソ連政府に対する不満を口にし、全連邦共産党ポリシェヴィキとソ連政府の国家政治に対する誹謗を流布しているユダヤ民族主義者である」と証言させた⁽²⁸⁾。

しかしながら、リューミン中佐の上司である国家保安相ヴィクトル・アバクモフは、この証言に基づいた医師団の陰謀論を断固として認めなかった。それは、あまりにも下らない説であると同時に、たとえ下らない説であっても病的に疑い深いスターリンの耳に入ったら、どんな恐ろしいことが起きるか予想できなかったからである⁽²⁹⁾。

しかしリューミン中佐は自身の行動を止めずに、今度は上司であるアバクモフが、エチンゲルへの必要な取り調べを妨害しているという話をでっち上げて、スターリンに手紙を送った。1951年7月2日にスターリンの手元に届いた手

紙には、アバクモフ大臣が捜査を妨害しており、総じて彼は国家にとっての危険人物で、周囲を息のかかった人物で固めているという内容が書かれていた⁽³⁰⁾。

この手紙は、リューミン中佐が自身に批判的な態度を取っていたアバクモフ大臣の排除目的と出世主義から送ったものだったが、実力者マレンコフがアバクモフ大臣に否定的な感情を持っていたことが手伝い、実際に7月4日にアバクモフは罷免され、同月12日に逮捕された⁽³¹⁾。

アバクモフの後任大臣にはセミヨーン・イグナチエフが任命された。そしてリューミンはあまり時間をかけずに大臣代理に就任した⁽³²⁾。リューミンは無事に上司の排除と出世に成功し、目論見通りに事態が進んだわけである。しかしながら、このリューミンの行動が、関係ない者を巻き込む大事件へと発展していく。

アバクモフ逮捕の翌日7月13日、中央委員会の「ソ連国家保安省の思わしくない状態について」という秘密文書が発表された。その中で委員会での審理の結果、リューミン中佐の手紙は「争う必要のない事実」だったと報告された⁽³³⁾。こうして、「リューミン中佐の陰謀」は、事実として処理されることに決まった。

そして、この秘密文書には、もう一つ重要な内容が含まれていた。

「医師の中に治療の際、党と政府の指導者の寿命を縮めることに意を傾けている者たちの秘密活動集団が、疑いなく存在している。これらの有名な医師たちの犯罪を忘れてはならない。⁽³⁴⁾」

中央委員会が医師による犯罪を指摘したため、国家保安省は調査しなくてはならなくなった。この時、同省の上級予審判事だったイヴァン・エリセエフはある実験を思いついた。クレムリンの医療衛生局に保管されていたジダーノフの心臓を、誰のものか伏せたまま5人の病理解剖学者に解剖させるという実験である⁽³⁵⁾。

結果は5人の医師が一致して、心臓の主は心筋梗塞によって死亡したと結論付けた。そして、この5人の中にジダーノフを死後解剖し、エゴ

ロフの依頼を受けて心筋梗塞の存在を隠蔽したヒョードロフがいたのである⁽³⁶⁾。

名前を伏せて解剖させたところ、ジダーノフの心臓の解剖結果が、死亡直後の結果と異なったため、ここに医師団による陰謀の存在が決定付けられてしまった。

虚偽の鑑定結果が、約3年の時を経て医師団陰謀の証拠となってしまったのである。

2. 医師団陰謀事件の経緯

1951年7月16日、かつてジダーノフの心電図を取った後に休暇に入ったカルパイ医師が逮捕された。これが医師団陰謀事件の始まりである。このカルパイの逮捕をきっかけに、医師の逮捕が始まった。

1952年2月15日、スターリンはバリヴィハにある政府の療養所で、副医療部長を務めていたR. I. ルイジコフの逮捕を許可した。逮捕後の取り調べでは、妻子の逮捕をちらつかせ、故意にシチェルバコフの死を早めたという犯罪やエメリヤン・ヤロスラフスキー⁽³⁷⁾の胃癌診断が遅れた怠慢を自供させた⁽³⁸⁾。

しかし、これらの供述は暴力や脅しによるでっち上げだったため、後々矛盾点が出てくる可能性があった。そこで、取り調べに当たったガルクシャ大佐は、医学的にみてルイジコフの取り調べ結果に矛盾が出ないように、国家保安省に協力的な医師に助言を求めることにした。そして、この時でっち上げの取り調べ結果に医学的アドバイスをしたのが、ジダーノフの心筋梗塞の前兆を訴えて左遷されてしまったチマシューク医師だった⁽³⁹⁾。

彼女が国家保安省に協力した経緯は不明だが、過去の処遇に対する復讐心だったのかもしれない。

1952年8月11日、チマシュークは1948年にジダーノフに起きた心臓の急性発作について、ヴィノグラドフ、エゴロフ、マヨーロフ、カルパイ、ウラジーミル・ヴァシレンコが異常を見逃したと証言した⁽⁴⁰⁾。

9月に入るとマヨーロフ、ヒョードロフ、そして既に退職していたクレムリン医療衛生局長だっ

たアレクセイ・ブサロフが逮捕された。10月18日にはエゴロフも逮捕された。ブサロフとエゴロフは、長期間後ろ手に縛られたまま棒で滅多打ちにされるなど、激しい拷問を受けた⁽⁴¹⁾。

その後、次々と医師がルビャンカ⁽⁴²⁾に送られ11月にはヴィノグラドフ、ヴァシレンコ、ヴォフシ、B. コーガン、12月にはグリーンシュテイン、フェリドマン、ヤコフ・チョムキンが送られた⁽⁴³⁾。

エゴロフの逮捕は、なんと彼と家族ぐるみの親交があったヴラシクにまで飛び火した。国家保安省はヴラシクを告発し、1952年12月1日の中央委員会幹部会で彼について話し合った。そこでヴラシクはアバクモフと共謀して、ジダーノフに対する陰謀を暴露したチマシュークの手紙を隠蔽したことにされてしまい、同年12月16日に逮捕された⁽⁴⁴⁾。

スターリンの警護責任者だったヴラシクは、取り調べで「私は逮捕された。つまり、スターリンもすぐになくなる。」と述べたが、聞き入れられなかった⁽⁴⁵⁾。

スターリンは医師団から自白を得るため「殴って、殴って、殴る」という取り調べ方法を指示した⁽⁴⁶⁾。この拷問に医師たちが耐え切れるわけもなく、“自白”によって医師団の陰謀が作り上げられていった。

こうしてスターリン主導により、本格的に動き出した医師団陰謀事件は、もはや誰も止めることができず、疑問を投げかけることすらできない状況になっていた。後にフルシチョフは、当時のことを次のように述べている。「(引用者注—スターリンから)政治局員は医師達の自白調書を受け取った。⁽⁴⁷⁾」「事件は固定されており、誰も事実を確かめることなど出来なかった。⁽⁴⁸⁾」「この恥ずべき事件は、スターリンが作ったものだ⁽⁴⁹⁾」。

年が明けた1953年1月10日、スターリンは『プラウダ』の記事の校正を行った。そこには、ジダーノフの心筋梗塞やシチェルバコフへの治療に過ちがあったことなどの事実の他に、医師団がアメリカのシオニストや外国の諜報機関と関係があったという、スターリンの憶測がまとめられた⁽⁵⁰⁾。そして、3日後の1月13日『プラウダ』に医師団陰謀事件が発表され、世界に公表された

のである。

事件のでっち上げに関わったチマシュークには、事件摘発の功により同年1月20日にレーニン勲章が授与された⁽⁵¹⁾。

3. スターリンの死とベリヤによる医師団の釈放

3-1 スターリンの死

一方で、この頃のスターリンは健康不安を抱えていた。既に1952年12月からは、スターリンがクレムリンの執務室に出勤する回数は激減していた⁽⁵²⁾。執務室への出勤は、年明けの1953年1月が5回、2月は4回であった⁽⁵³⁾。

1953年2月28日土曜日、スターリンは、マレンコフ、フルシチョフ、ベリヤ、ニコライ・ブルガーニンをクレムリンに招待し映画を鑑賞した。その後、スターリンの提案で“近い方のダーチャ⁽⁵⁴⁾”へ行って“昼食⁽⁵⁵⁾”を取った⁽⁵⁶⁾。

“昼食”は長く続き、散会した時にはすでに3月1日の朝になっていた。この“昼食”は毎回穏やかな雰囲気で行われるわけではなかったが、この日のスターリンは酒も入りとても上機嫌で、冗談もよく口にしていた⁽⁵⁷⁾。

3月1日日曜日、いつもは朝10時から11時の間に起きてくるスターリンに動きはなく、夕方18時半ようやく部屋の電気がついたのが確認されている。しかしその後も動きがなく、警護担当者たちは不安になったが、スターリンの許可なく勝手に入室することを恐れて、手を打てずにいた。22時30分になって手紙を届ける用事ができたため、ようやく入室したところ横たわっているスターリンを発見した⁽⁵⁸⁾。

この時、スターリンの警護責任者ミハイル・スターロスチンは、上司の国家保安相イグナチエフに電話を入れたが、イグナチエフは対応を嫌って内務相ベリヤに電話するよう指示した⁽⁵⁹⁾。

結局、スターリンのもとに医師が来たのは3月2日朝9時頃だった。スターリンの異変を確認してから実に10時間以上経過していたことになる。やって来たのは、保健省内科医長で心臓学者のパーヴェル・ルコムスキーをはじめとする、4名の医師だった⁽⁶⁰⁾。

到着したルコムスキーは、スターリンの右腕と左足が麻痺していることを確かめた。そして、すでに会話もできず、重体であることを確認した⁽⁶¹⁾。

しかしながら、幹部会ビュローのメンバーは、この秘密の口外を恐れてスターリンを病院には搬送せずに、ダーチャで治療することを選択した。彼らはスターリンの傍らに医師による当直を配置することを決め、自分たちも当直を組織した。マレンコフとベリヤは日中の当直を選択し、夜はカガノーヴィチとヴォロシーロフ、深夜はフルシチョフとブルガーニンが担当した⁽⁶²⁾。

1953年3月5日21時50分、スターリンは息を引き取った。国民には翌3月6日のモスクワ放送で発表された⁽⁶³⁾。

こうした経緯から、スターリンは医師団陰謀事件によって、自ら死を遠ざける二つの要素を失ったことがわかる。

一つは、医師団逮捕の間接的な影響を受けて逮捕された、前警護責任者ヴラシクである。20年以上もの間、スターリンの警護を務めていたヴラシクであれば、3月1日にスターリンの異変を感じた時に、すぐにスターリンの状態を確認出来たはずである。多少の躊躇があったとしても10時間以上も放置することはなかっただろう。ヴラシクが逮捕後に述べた「私は逮捕された。つまり、スターリンもすぐになくなる。」という言葉は、現実のものになった。

もう一つは、やはり逮捕された医師団である。スターリンの専門医が軒並みなくなった影響は大きい。スターリンが倒れたとき、最初に診察したルコムスキーは、もしすぐに適切な治療が施されていれば、スターリンを助けることができたと信じていた⁽⁶⁴⁾。しかし、スターリンは国内最高権威の医師団から治療を受けることはできなかった。

投獄されている医師団を一時的に釈放して、治療のために連れてくることもできたと思われるが、フルシチョフはじめ当時現場に居合わせたどの人物も、国家保安相イグナチエフに対して医師団の釈放を求めなかった⁽⁶⁵⁾。

逮捕された医師団を呼び寄せなかったのは、彼

らが危険な「暗殺者」だったからなのか、それともスターリンの死を待つ暗黙の総意が存在していたからなのか、今となってはわからない。しかしながら、倒れているスターリンを見つけても、直ちに病院に搬送しようとしなかったマレンコフやフルシチョフ、そしてベリヤの行動を見れば、後者であったことを強く推測させる。

医師団陰謀事件によって、スターリンは「早期発見」と「国内最高の医師団」という、2つの重要な要素を自ら潰してしまったのである。

3-2 ベリヤ主導の釈放

スターリンの死後、クレムリンの指導部では、医師団陰謀事件について議論が交わされていた。この時、マレンコフとカガノーヴィチは、人民にネガティブな印象をもたらすことを理由に、医師団の釈放を急がないことを提案した。ヴァチュエラフ・モロトフは態度をはっきりさせなかった。しかし、ベリヤだけは、最初からこの事件がでっち上げで、不法なものだと信じていることを隠さなかった。そして、周囲の反対にも関わらず、ベリヤは早急なる釈放を主張した⁽⁶⁶⁾。

ベリヤは逮捕された医師たちに、取り調べに対する不満を詳細に書面に記載することを提案した。そして逮捕された医師全員が、身体的な暴力を受けたことを訴えて、それまでの自分の供述を否定した⁽⁶⁷⁾。

この書類をもとに、1953年3月31日ベリヤは医師団の刑事責任追求の中止と、この事件で逮捕された者たちの釈放を承認した⁽⁶⁸⁾。

結果として、4月3日の中央委員会幹部会で、ベリヤのイニシアティブにより、医師団の釈放と名誉回復、国家保安相イグナチエフの責任追及、責任ある同省職員の起訴などが承認された⁽⁶⁹⁾。

翌日1953年4月4日、『プラウダ』の紙面で内務省の発表文が報じられた。そこには、医師15名の無実が報じられており、彼らは即日釈放された。記事では、医師の自白は「旧国家保安省の検察部門が、ソ連の法律の下では厳禁されている、許し難い取り調べ方法を用いて得たものであることが明らかにされた⁽⁷⁰⁾」として、証拠書類が犯罪の根拠にならないことも併せて発表され

た⁽⁷¹⁾。関係者の処罰も発表され、チマシュークはレーニン勲章を剥奪され逮捕された⁽⁷²⁾。

そして、この発表は、3つの意味において前例がないものだった。一つは、公に過去の政策の過ちを認めたことである。これは指導者の無過失性を重視していたスターリン時代のソ連では、まったく前例のないことであった⁽⁷³⁾。

もう一つは、「厳禁されている許し難い取り調べ方法」と、拷問による自白の強要が行われていたことを認めたことである。もちろん、そうした取り調べが行われていたことは、誰もが知る公然の秘密ではあったが、公式にそれを認めたこともまた初めてのことであった⁽⁷⁴⁾。

最後は、「内務省」の名でこの発表が出されたことである。1月13日の事件の第一報は、中央委員会幹部会の名で報じられていたため、本来であれば、この時も中央委員会幹部会の名で発表しなければならなかった。しかし『プラウダ』には、「ソ連内務省の報告」として掲載された。フルシチョフとブルガーニンによると、彼らにとってこれは完全な不意打ちで「我々はベリヤのこのような狡猾さに衝撃を受けた」と述べている⁽⁷⁵⁾。

つまり、この記事は、国内外でソ連の権威に傷をつける可能性がある内容を、ベリヤ率いる内務省が主導して発表したところに本当の意味が隠されている。

ベリヤは、国民に対して彼が内務相として、不正事件を暴き、医師団を釈放したという印象を作り上げたかったのである⁽⁷⁶⁾。表面的な自由主義を市民に見せることで、インテリ層を中心に市民の人気を高めることが目的だった⁽⁷⁷⁾。

ベリヤは、1938年12月にニコライ・エジョフの後任として、内務人民委員のポストに就いた時、イニシアティブを発揮して、エジョフによる逮捕者を数万人釈放した⁽⁷⁸⁾。当時、病的に残忍な人物として知られていたエジョフの後任に就いたことで、世論はベリヤを歓迎し肯定的に受け入れた⁽⁷⁹⁾。そして、この時から社会の一定層において、ベリヤは1930年代後半の「社会主義の法秩序」を回復させた人物という評判が持たれていた⁽⁸⁰⁾。

ベリヤは、医師団陰謀事件を利用して、1938

年を再現しようとしたのである。ベリヤの一貫した医師団釈放の主張と『プラウダ』における内務省の独断発表は、国内外の世論に自分を売り出す演出であった。

『プラウダ』での発表の翌4月5日付で、名目上の責任者である国家保安相イグナチエフは、部下たちの職権乱用の責任を問われて罷免された⁽⁸¹⁾。

おわりに

本論文での検討により、医師団陰謀事件の開始過程は、二つの段階に分かれていることが明らかになった。

第一段階は、1948年にジダーノフに心筋梗塞の前兆があることが判明してから、そのことが闇に葬られるまでである。チマシュークは、エゴロフにジダーノフの心臓の問題について報告したが無視されたため、スターリンの警護責任者ヴラシクに手紙を書いた。しかし、この時のスターリンはこの問題に注意を向けることなく、ヴラシクに手紙を文書保管室に送るよう指示しただけだった。そして、エゴロフがジダーノフの死後、遺体を解剖したヒョードロフに口裏合わせを依頼したため、ジダーノフの心筋梗塞は闇に葬られた。この第一段階の時点では、まだ医師団の逮捕につながる要素は見当たらない。

第二段階は、1950年のエチンゲルの逮捕とリュージン中佐による自白の強要以降である。リュージン中佐は拷問を伴う取り調べによって、エチンゲルに他の医師たちがユダヤ民族主義者で、故意に不適切な治療を行っていることを自白させた。これが、その後の医師団逮捕につながった。

第二段階で、第一段階の小さな出来事が都合よく利用されていく過程は、本論で検討した通りだが、重要なのはこの第一段階と第二段階をつないだものである。エチンゲルの逮捕が、二つの段階をつなぐ接点になっているが、その背景にあったものこそ「コスモポリタニズムとの戦い」という名の「反ユダヤ主義」である。

ただし、反ユダヤ主義が単純に二つの段階をつ

ないだけではない。反ユダヤ主義により第二段階が始まり、第二段階が進む過程で、第一段階が無理やり連結されたのである。

つまり医師団陰謀事件は、純粋な反ユダヤ主義で成り立っている集団粛清ではなく、反ユダヤ主義で始まった第二段階の都合を満たすために、全く関係ない第一段階が組み込まれて成立しているのである。これが医師団陰謀事件を複雑化させている要因である。

そして、事件の終結と医師団の釈放については、ポスト・スターリンを狙ったベリヤの巧妙なパフォーマンスだったことが明らかになった。

医師団釈放を皮切りに、ベリヤはあらゆる過去の問題を取り上げては、幹部会を攻め立てた。こうした改革的な動きの目的は、ポスト・スターリンのソ連で、自らの地位を強化するためであった⁽⁸²⁾。しかしながら、ベリヤの行き過ぎた行動は、フルシチョフやマレンコフの不信と反感を買い、1953年6月26日ベリヤは逮捕された。

医師団釈放を主導したベリヤの逮捕は、多くの医師に再逮捕の恐怖と不安を与えることになった⁽⁸³⁾。幸いなことに、医師団がその後再逮捕されることは無かったが、その恐怖は1953年12月23日にベリヤが銃殺刑に処せられた後も続いたことだろう。

スターリンが関与した最後の集団粛清である医師団陰謀事件は、反ユダヤ主義を接点としてリュージン中佐の陰謀で始まり、ベリヤのパフォーマンスで終わったのである。

註

- (1) *Pravda* No. 13, January 13, 1953.
- (2) *Idid.*
- (3) *Idid.*
- (4) *Idid.*
- (5) 渡辺善一郎『第三のソ連』（日本出版共同株式会社、1953年）59頁。
- (6) ルイス・ラーパポート『医師団陰謀事件：ユダヤ人大量虐殺』（駐文館編集部訳）（駐文館、1993）319-320頁。
- (7) A. S. Kimerling, *Terror na izliote*. «Delo

vrachei» v uralskoi provintsii (Perm', Permskii gosudarstvennyi institut iskusstva i kultury, 2011), p. 7.

- (8) 外務省情報文化局「ソ連の医師暗殺団逮捕事件」『世界の動き』（13号、1953-1）18頁。
- (9) F. ベック、W. ゴディン『粛清の歴史』（小野武雄訳）（国際文化協会、1954）242頁。
- (10) 例えば東欧の食糧危機からくる国民の不安をそらすためなどがある。外務省情報文化局・前掲論文（13号）19頁。
- (11) ストローブ・タルボット編『フルシチョフ回想録』タイムライフブックス編集部訳（タイムライフインターナショナル、1972年）280頁。
- (12) S. Yu. Rybas, *Stalin* (Moskva, Molodaia gvardiia, 2009), p. 834.
- (13) *Idid.*
- (14) *Idid.*, pp. 834-835.
- (15) *Idid.*
- (16) *Idid.*, p. 835.
- (17) G. V. Kostyrchenko, *Stalin protiv «kosmopolitov»*. *Vlast' i evreiskaia intelligentsiia v SSSR* (Moskva, ROSSPEN, 2010), p. 250. (以下、Kostyrchenko, *Stalin protiv «kosmopolitov»* と略す)。
- (18) G. V. Kostyrchenko, "Delo vrachei," *Rodina*, No. 7-1994, p. 68. (以下、Kostyrchenko, "Delo vrachei," と略す)。
- (19) *Pravda* No. 28, January 28, 1949. (以下 *Pravda* No. 28. と略す)。
- (20) G. V. Kostyrchenko, "Kampaniia po borbe s kosmopolitizmom v SSSR," *Voprosy istorii*, No. 8, 1994, p. 53; *Pravda* No. 28.
- (21) 1931年1月12日スターリンは、アメリカの通信社の取材に対して、「共産主義者は、一貫した国際主義者として、反ユダヤ主義の妥協不能で不倶戴天の敵にならないことはできない。」と反ユダヤ主義に反対の意見を述べている。このことは、1936年1月30日の『プラウダ』に掲載されたモロトフの演説の中でも引用されており、ソ連一般市民の知るところであった。

- (22) 和田春樹『スターリン批判 1953～56年：一人の独裁者の死が、いかに20世紀世界を揺り動かしたか』（作品社、2016年）25-28頁。
- (23) ヨコタ村上、孝之「コスモポリタニズムの陥穽：ロシアにおける反ユダヤ主義の歴史から」『言語文化共同プロジェクト』（2016）71-72頁。
- (24) Kostyrchenko, “Delo vrachei,” p. 66.
- (25) 党中央委員会政治局員候補。和田・前掲書 29頁による。
- (26) Kostyrchenko, “Delo vrachei,” p. 66.
- (27) *Idid.*, p. 67.
- (28) *Idid.*
- (29) Kostyrchenko, *Stalin protiv «kosmopolitov»*, p. 243.
- (30) Rybas, *op. cit.*, p. 832.
- (31) *Idid.*
- (32) *Idid.*, p. 833.
- (33) *Idid.*, pp. 832-833.
- (34) *Idid.*, p. 833.
- (35) *Idid.*
- (36) *Idid.*
- (37) 革命家（1878-1943）。1939年から没するまで全連邦共産党ボリシェヴィキ中央委員。胃癌で死去。
- (38) Kostyrchenko, “Delo vrachei,” pp. 67-68.
- (39) *Idid.*, p. 68.
- (40) *Idid.*
- (41) *Idid.*, pp. 68-69.
- (42) ソ連国家保安省本部の換喩。
- (43) Kostyrchenko, “Delo vrachei,” p. 69.
- (44) Kostyrchenko, *Stalin protiv «kosmopolitov»*, p. 263.
- (45) A. Sergeev, E. Glushik, *Besedy o Staline* (Moskva, Krymskii most-9D, 2006) , p. 32.
- (46) Anon., *O kulte lichnosti i ego posledstviakh. Doklad Pervogo sekretaria TsK KPSS N. S. Khrushcheva XX s`ezdu KPSS 25 fevralia 1956 g* (Izvestiia TsK KPSS) , No. 3-1989, p. 155.
- (47) *Idid.*
- (48) *Idid.*
- (49) *Idid.*
- (50) Rybas, *op. cit.*, p. 847.
- (51) 重森唯士『ソ連の粛清：粛清されたその歴史の全貌』（実業之日本社、1956年）215頁。
- (52) 和田・前掲書 53-54頁。
- (53) 同上。
- (54) モスクワのクンツェヴォにあるスターリンのダーチャ。
- (55) スターリンはこのような夜とても遅い夕食を“昼食”と言っていた。N. Khrushchev, *Vospominaniia: Izbrannye fragmenty* (Moskva, Vagrius, 1997) , p. 263.
- (56) *Idid.*
- (57) *Idid.*
- (58) I. Benediktov, A. Rybin, *Riadom so Stalinym* (Moskva, Algoritm, 2010) , p. 76. 和田・前掲書 57頁。
- (59) *Idid.*, p. 77.
- (60) *Idid.*, p. 78. 和田・前掲書 57頁。
- (61) Khrushchev, *op. cit.*, p. 264.
- (62) *Idid.*, pp. 264-265.
- (63) 和田・前掲書 63頁。
- (64) Ia. Ia. Etinger, *Eto nevozmozhno zabyt` : Vospominaniia* (Moskva, Ves` Mir, 2001) , p. 156.
- (65) R. Grugman, *Sovetskii kvadrat Stalin-Khrushchev-Berliia-Gorbachiov* (Sankt-Peterburg, Piter, 2011) , p. 122.
- (66) Etinger, *op. cit.*, p. 157.
- (67) Kostyrchenko, “Delo vrachei,” p. 71.
- (68) *Idid.*
- (69) 和田・前掲書 81頁。
- (70) 外務省情報文化局「医師暗殺団の釈放」『世界の動き』（16号、1953-4）1頁。
- (71) 同上。
- (72) *Pravda* No. 94, April 4, 1953.
- (73) 外務省情報文化局・前掲論文（16号）2頁。
- (74) 同上。
- (75) Etinger, *op. cit.*, p. 159.
- (76) *Idid.*
- (77) Kostyrchenko, “Delo vrachei,” p. 71.
- (78) Etinger, *op. cit.*, p. 169.
- 引用元には「外務人民委員」と書かれている

が、「内務人民委員」の誤りのため、筆者修正の上引用。

(79) Kostyrchenko, “Delo vrachei,” p. 71.

(80) Etinger, *op. cit.*, p. 169.

(81) 重森・前掲書 221 頁。和田・前掲書 82 頁。

(82) 和田・前掲書 87 頁。

(83) Etinger, *op. cit.*, p. 170.

本論文は令和 2 年度日本大学国際関係学部研究費個人研究費の成果に依る。